

## 地域で愛される街路樹育成に向けた 協働型管理手法の可能性に関する研究

A study on the possibility of collaborative management method  
for street trees loved by the community

川口 将武（KAWAGUCHI Masatake）

我が国の街路樹は、整備から 50 年近く経過し大径木となり、単調な植栽や行政の管理コスト増大、強剪定による景観悪化等から、その更新と質の改善が切望されている。次の 50 年に渡り都市整備及び管理の投資効果を得るためには、街路樹の新しい質を定立させる必要がある。街路樹の新しい質としては、価値向上・まちづくり・地域活性化機能といった「都市ブランディング」に関わる機能が求められている。これまでの交通安全・景観形成・環境保全・生物生息空間機能についてはイメージが共有されているが、多様な利用に対してブランディングに資する街路樹の新しい質は提示できていない。一方で、街路樹管理に着目すると、自治体予算における維持管理費が縮減していく中で、行政だけの管理は限界が指摘され、官民協働の街路樹管理と新しい質の創出を同時に実現させる方法が強く求められている。そこで本研究では、「土地利用や居住者属性、街路樹管理に関する活動の有無などの社会条件により、それぞれに適した協働型の街路樹管理が可能である」ことを検証するため、様々な社会条件において街路樹の心的価値を分析し、愛着を基にした協働型街路樹管理の可能性や方策について考察することを目的とする。

平成 29（2017）年度は、「沿道住民の街路樹の維持管理への参加意欲等に影響する要因の構造」を明らかにした研究成果をあげた。概要は以下の通りである。

街路樹に関する市民要望を把握<sup>1)</sup>している東大阪市において、市民要望が多い 22 路線から緑道などを除いた車道を中心に構成された一般的な 16 路線の沿道住民を対象に、街路樹や地域に対する評価や今後の街路樹の維持管理への参加意向を把握するためのアンケート調査を実施した。アンケートは、抽出した 16 路線に面する全ての建物に入居または建物で就業する全戸を対象として、2017 年 11 月から 12 月に 3,587 票をポスティング配布し、郵送にて 400 票回収した（有効回答率：11.2%）。

アンケート結果分析として、共分散構造分析で得られた沿道住民の街路樹の維持管理への参加意欲等に影響する要因の構造モデル（図－1）を示す。その結果、『地域の価値認識』の意識が高まると『街路樹の価値認識』に対する意識も同時に高まり、互いに影響を及ぼし合いながら正の強い影響を与え合うことがわかった。『街路樹の維持管理への参加意欲』は、『街路樹の価値認識』に強く影響を受け、『街路樹の価値認識』は、『街路樹の課題認識』に及ぼす影響が弱く、『街路樹の管理状態に対する評価意識』、『街路樹の果たす役割に対する認識』に強く影響を及ぼす構造であることがわかった。今後、行政が沿道住民と共に街路樹

を健全に育成する取り組みを拡げるためには、沿道住民の共通認識としての『街路樹の価値認識』の醸成が求められる。

1) 東大阪市の街路樹における市民要望と空間的・環境的要因の関係性」, (川口将武, 大平和弘, 上田萌子, 藤本真里, 赤澤宏樹), 環境情報科学 学術研究論文集 31, 査読有, (環境情報科学センター), p. 225-p. 230, 2017年

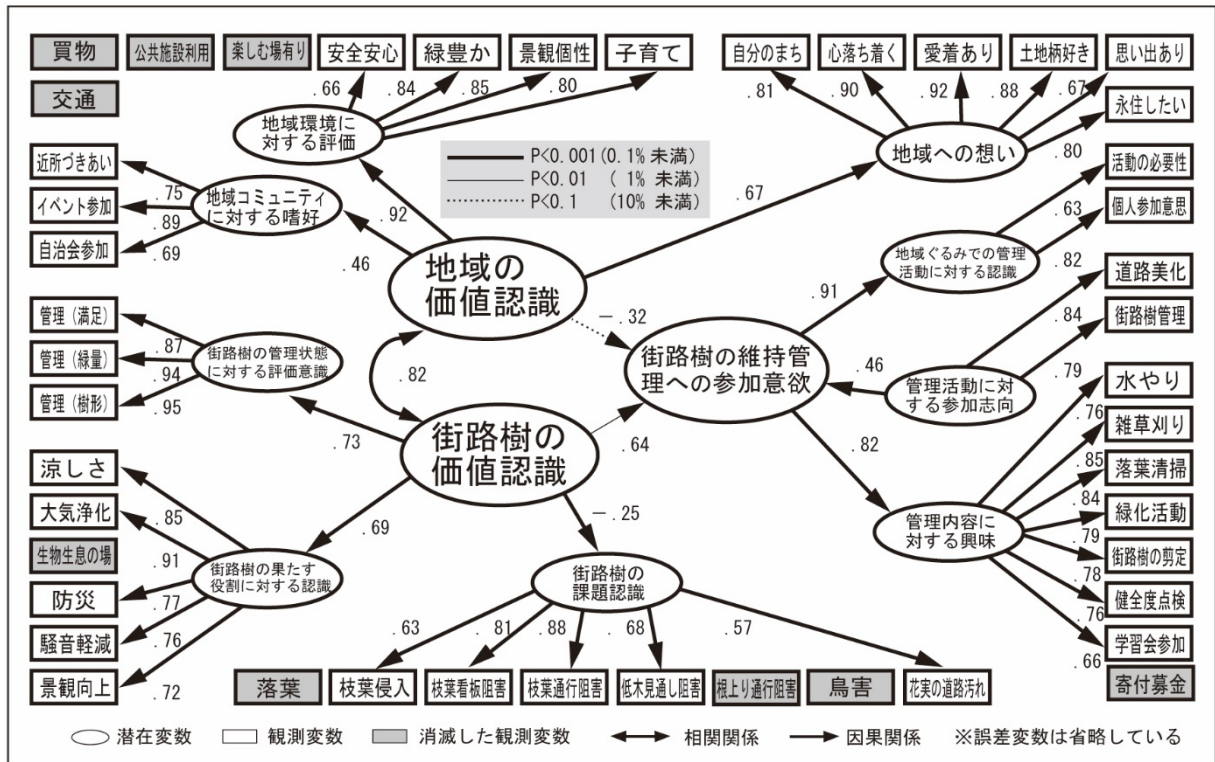


図-1：沿道住民の街路樹の維持管理への参加意欲等に影響する要因の構造モデル